

第三回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー概要報告

奈良教育大学 北村 恭康

日時 令和元年8月24日(土) 10時30分～13時00分

場所 奈良県立万葉文化館

参加者 井上さやか(万葉文化館)、中矢和美(済美小)、坂元亜衣(学生)、北村恭康(奈良教育大)

内容

(1) 単元構想の検討

○単元名「月に思う」 奈良教育大学国語教育専修3回生 坂元亜衣

中学1年生の国語教材である。この教材を通して、日本特有の文化である和歌に触れることで、いにしへの心に触れ、言語文化に親しむことができると共に、古典の文章に出会い、現代とのつながりを考えることができる。

・月に関する歌をテーマにしたいが、広がりすぎるのではないか。

・テーマの範囲を決めた方がよい。
・テーマの範囲を奈良か万葉集・古今和歌集に限定をしたらよいのではないか。最初に持ってくる歌は古今和歌集なので。

「天の原ふりさけ見れば 春日なる三笠の山に 出でし月かも」

- ・空に浮かぶ 月 月日の月 両方かけている歌もある。
- ・中秋の名月 というが、今の季節とは違う。暦や季節の違いを扱う題材とも思う。
- ・歌全てを扱っている中からではなく、マンガなどからでもよいのではないか。
- ・教科書にある「秋風にたなびく雲の絶え間より もれ出づる月の影のさやけき」から入った方が生徒には分かりやすいのでは。そして奈良に関わる奈良時代の歌を探してみよう。(地域限定)
- ・万葉集で奈良に関わる歌を探してもよいのでは。⇒ 指導者も歌が分かる
- ・館内のパソコンで探せば出てくるよ。
- ・古文特有のリズム

歌による。大雑把に言うと七五調と五七調の違いはある。五七調が万葉集には多い。平安時代以降は、そのリズムが崩れてくる。切れ目が変わってくる。

「天の原ふりさけ見れば／春日なる三笠の山に出でし月かも」 奈良朝のリズム 五七調

「秋風にたなびく雲の絶え間より／もれ出づる月の影のさやけき」 平安朝のリズム 七五調

- ・現代人は七五調に慣れている。
- ・阿倍仲麻呂は奈良時代の人で、その人の歌が載っているのが古今集で平安時代の歌集というところもリズムに関係が出てきたのでは。
- ・歌会始は冷泉家に伝わったリズムと理解している。
- ・旧・新暦で季節感が違うというのをどこかで押さえた方がよいのではないか。

七夕を詠っている歌も、今は夏だが七夕は秋の歌となっている。

春 1月～3月 夏 4月～6月 秋 7月～9月 冬 10月～12月

- ・秋の月を扱ったのが多いのでは。



- ・采女祭り ⇒ なぜ観月祭なのか。
- ・現在とのつながり ⇒ 情景は同じようなものではないか。
意味を現代語訳したら、今の自分の思う情景に共感できるのではないか。
- ・この歌には月の形が書かれていないので想像しなければならないが、満月と決まっていない。
- ・中秋の名月の積み重ねが 月⇒満月と固定観念が出来上がっているのでは。
- ・海外では月は不吉と思われている。日本では月を愛でる 文化の違いでは。
- ・「良さ」 過去からのつながり 時間の流れの中で
良し悪しではなく、独自の文化を味わう。未来に残す。ということではないのか。
- ・万葉集を歴史書ではなく歌集として扱えばよい。
- ・従来あまり取り上げられなかった万葉集を教材として取り上げるにはどうしたらよいのか、教材研究を深めて行ってほしい。
- ・いろいろな歌に触れてみたいということで鑑賞会を開く。
- 図書室で奈良県内で歌われた万葉集歌を探す。
- 飛鳥座神社は、9時30分から見学する。飛鳥城は藪のため中止